

Phraseologyの重要性 - その概観と教育学的応用

著者	井上 亜依
雑誌名	長崎外大論叢
号	11
ページ	29-39
発行年	2007-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000196/



Phraseology の重要性

— その概観と教育学的応用

The Significance of Phraseology — its Outline and Educational Application

井上 亜依

Abstract

This paper discusses the following three points: (1) the outline of phraseology, (2) an introduction to phraseological studies in Japan and abroad, and (3) a proposal to introduce phraseological viewpoints to English education in Japan.

Recently, much attention has been paid to phraseology because phrases play important roles in first and second language acquisition. Phraseology is regarded to have been established as an area of linguistics in the late 20th century, but actually, it has a long history.

This paper explains its outline from the historical perspective in Japan and abroad and introduces some phraseological studies which adopt top-down and bottom-up approaches. Lastly, I will examine how effective it is to teach phrases to college students by means of teaching materials. The materials for learning useful phrases used in class seem to have helped improve students English writing proficiency. I will show how students' writing proficiency improved in my writing class and I will try to show how phraseology can help improve English learners' proficiency.

はじめに

本稿は、近年注目浴びつつある phraseology (成句表現研究) について、大きく3つのこと、phraseology の概観、phraseology の具体的研究の紹介、phraseology の英語教育への応用を述べる。

phraseology とは成句表現研究のことであり、人間の言語行為において重要な役割を果たしている。人間が言語を作り出す際、語を合わせて句を作り、そしてそれより大きな単位である文を作り出すというような段階を経ているのではなく、予め固定化された塊、すなわち成句表現が頭の中に入っており、その成句表現を状況に応じて使い分ける。これが phraseology の根本的な考え方である。実際、人間が書いたもの、話したのを見てみると、成句表現は枚挙にいとまがない。

海外、特にヨーロッパを中心に成句表現の重要性の認識が高まり、成句表現の学会ができるなど様々な成句表現に関する研究がされている。また、近年欧米で出版されている辞書も成句表現を記述するなど、辞書学の観点から phraseology がなされている。しかし、ヨーロッパなどで行われている phraseology は、特定のジャンルの中にどのような成句表現があるのかということだけを述べるだけで、日本での phraseology とは性質が異なる。

日本で phraseology と銘打った研究は、筆者が調べた限り数少ない (八木 1999, 2000, 2006, 2007a;

八木・井上 2004; 井上 2003, 2004, 2005b; Inoue 2005a, c, 2007)。日本での成句表現研究は、日本がこれまでたどってきた英語学研究の伝統を深く受け継ぎ、外国語としての英語研究の側面に光を与えるものである。

日本における科学的な英語学研究の始まりと言われている 1912 年の市河三喜『英文法研究』以来、日本は現代まで独自の英語学研究の道を歩んできた。その途中で、構造言語学、生成文法、認知言語学などの外国の理論や研究に影響を受けることはあったが、現在は様々な領域で日本独特の研究がされている。

日本の英語辞書学も同様である。これまでは海外の辞書を参考にして作られることがあったが、近年出版されている辞書は、英語コミュニケーションの手段としての役割を果たそうと試みている。そのため、文法規則や単語を覚えるだけでは不十分と考え、様々な成句表現を覚えることの重要性より、成句表現の記述が充実してきている。

筆者は、これまで科学的言語研究の立場から phraseology を行ってきた。そこで、本稿は英語教育の立場から phraseology の重要性、可能性を探る。

1. phraseology とは

前述したが、phraseology とは成句表現研究のことである。Hartmann and James (1998: 109) によると、phraseology が取り扱う範囲は、"The study of phrases, idioms and multi-word expressions." (sv. phraseology) である。日本では、まだ phraseology という言葉はあまり定着しておらず、それに相当する日本語の研究名もないが、八木 (2006) は「成句論」と呼んでいる。

1.1 発生

phraseology は、大きくは 2 つの立場、理論的研究と辞書学的・教育学的立場から発生した。以下にそれぞれを概観する。

1.1.1 理論的研究の立場

phraseology について初めて述べた著書は、Charles Bally's "Traite de stylistique française" (2 vols, Heidelberg, 1909) である。残念ながら、phraseology についての考え方などは広まらず、長い間注目を浴びることがなかった。その後、1930, 1940 年代になって、ロシアの英語力向上のための国家政策の一環として、phraseology が Victor Vladimirovich Vinogradov と Natalya Nikolaevna Amosova によってなされた。Vinogradov は、ロシアの phraseology の父と呼ばれ、phraseology を体系的に示し、phraseology で取り扱う成句表現を phraseological units と初めて呼んだ人である。その後、Amosova が Vinogradov の体系に修正を加えた。これより、phraseology の存在が国際的に認められ、活発に研究をされ始めたかというところではない。1970 年代に入って、(1) に示す研究が、異なった観点から phraseology の概観を行うことにより phraseology が注目を集めるようになった。

- (1) a. *Idiom Structure in English* Adam Makkai (1972)
- b. *Problem der Phraseologie* Harald Thumh (1978)
- c. *Handbuch der Phraseologie* Harald Burger/ Annelies Buhofer/ Ambros Sialm (1982)
- d. *Phraseologie der Deutschen Gegenwartssprache* Wolfgang Fleischer (1982)

このような理論的立場より phraseology は生まれ、その後、Mitchell, Halliday, Sinclair などの Neo-Firthian と呼ばれる人たちの collocation 研究などがあり、現在に至っている。ただし、現在に至るまでに忘れてはならないのは、コーパスの発達である。現在行われている phraseology の大半はコーパスをなくしてはできない研究である。それは (2) に示すように Cowie が述べているとおりである。

- (2) "phraseology first began to interest applied linguists before learners' dictionaries were first thought of, and has come into prominence again since the early 1980s, as a result of the development of large-scale text corpora."
(Cowie 1999:2)

1.1.2 辞書学・教育学的立場

教育学的・辞書学的立場からの phraseology は、1920 年代、H. E. Palmer により東京から始められる。その後、1931 年に A. S. Hornby が加わり、1933 年に *Second Interim Report on English Collocations* が出版された。当時、(3) に示すように、Palmer は英語学習者にとって英語を難しくしているのは語連結と考えていた。

- (3) It will tend to confirm his impression that it is not so much the words of English nor the grammar of English that makes English difficult, but that that the vague and undefined obstacle to progress in the learning of English consists for the most part in the existence of so many odd comings-together-of-words.
(1933:13; Cowie 1999:52f.)

この記述からわかるように、当時は教育学的立場から phraseology の研究がなされ、また phraseological units ではなく、comings-together-of-words という用語が使用されていた。

その後、*A Grammar of English Words* (1938), *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (1942), *Oxford Dictionary of Current Idiomatic English, Volume I* (1973), *Longman Dictionary of English Idioms* (1979), *Oxford Dictionary of Current Idiomatic English, Volume 2* (1985), *Selected English Collocations* (1982), *The BBI Combinatory Dictionary of English* (1986), *The BBI Combinatory of English Words Combinations* (1997), *A Dictionary of American Idiom* (1975, 1987) の辞書で phraseology の創意工夫がなされ、現在出版されている辞書にまで発展している。

2 phraseology の具体的研究

この節では、phraseology の具体的研究を紹介するが、その前に、phraseology の概念を述べ、その後、理論的立場、実証的立場からの研究を紹介する。

Burger (ed.) (2007) によると、phraseology には以下のような共通概念がある。

- (4) ..., today there is a general consensus that phraseology encompasses a very broad palette of linguistic phenomena and issues.
(Burger (ed.) 2007: XII)

2.1 理論的立場からの研究

現在、理論的立場からの phraseology は、Burger (ed.) (2007) でも述べられているが、認知言語学の立場からの研究が盛んに行われている。

- (5) In the meantime, certain special areas of research in phraseology have come to assume a central role, namely: the cognitive base of phraseology (as an area of Cognitive Linguistics especially in connection with cognitive linguistic research on metaphor), along with intercultural and cultural semiotic aspects of phraseology. (Burger (ed.) 2007: XIII)

2.2 実証的立場からの研究

世界、特にヨーロッパでは、特殊目的コーパスなどを使用して、どのような成句があるかを述べる研究が大半を占めており、成句表現の文脈に応じた意味・機能を探る研究は、Aijimer (2002), Karkkainen (2003) などわずかである。

一方、日本での phraseology といえば、成句表現が繰り返し使用されることで多義を持ち、その多機能を探るという研究がもっぱらである (八木 1999, 2006, 2007a; 八木・井上 2004; 井上 2003, 2004, 2005b; Inoue 2005a, c, 2007)。筆者が調べたところ、日本での phraseology は上記の研究以外見当たらない。

なぜ日本と世界の phraseology にこのような違いがあるのかということであるが、英語母語話者はあまりにも英語に埋没しすぎて何が成句表現であり、それが文脈に応じてどのような機能を持つかわからないからと考えられる。その点では、phraseology は外国語として英語に取り組む研究者には取り組みやすい分野であるといえる。また、冒頭でも述べたが、日本は独自の英語研究の歴史をたどってきたということも深く関連している。以下に簡単に日本の phraseology について述べる。

2.2.1 日本の phraseology

ここでは、日本の phraseology について簡潔に説明する。詳しくは八木・井上 (2007 to appear) を参照されたい。

前述したが、phraseology の英語教育学的立場からの発生に、日本で活躍したイギリス人英語教師の Palmer と Hornby を忘れてはならない。しかし、彼らの phraseology に対する功績は、彼ら自身で作上げられたものではなく、彼らに先立って日本で英語の研究と教育に多大な貢献をなし、多くの著作・辞書を残した斎藤秀三郎から深く影響を受けている。その他、神田乃部、南日恒太郎、勝俣銓吉郎は日本の phraseology 研究の先駆者であり、世界的な phraseology の先駆者と言っても過言ではない。このように、我が国には、世界に先駆けて phraseology を実践した研究者たちがいたことを認識しておく必要がある。それぞれの研究者の phraseology に対する考え、取り組みは八木・井上 (2007 to appear) を参照して頂きたいが、かいつまんで斎藤秀三郎の果たした役割と彼の考えを述べておく。

斎藤は、phraseology と呼ばず、彼自身の用語である idiomology を使用した。1915 年に出版された『熟語本位英和中辞典』) の英語名は *Saito's Idiomatic English-Japanese Dictionary* である。ではその idiomology とは斎藤にとってどのようなものだったのだろうか。 *Advanced English Lessons* (1901-1902) の "Preface" から引用しておく。

- (6) It is true that there is English Grammar; but, as it is generally taught and studied, it is nothing more than a set of rules dealing with mere form without matter, and it is justly condemned as being rather a hindrance than a help to the acquirement of the living language. No grammar, rhetoric, or lexicon in existence treats of the living physiology of the language, the multifarious functions of each individual word, the nice distinctions and delicate shades of meaning peculiar to each word and phrases, the spirit and genius of the English idiom. It is not sufficient explanation to say that an expression is idiomatic. Idiom is a growth, and all growth is subject to natural law. Some idioms have arisen from a tendency to brevity, others from considerations of emphasis, and still others from the necessity of distinction. The study of formation of idiom reveals that language, as it is, has not been formed at random, but that the expressions of human thought is governed by laws of economy no less rigid than those which regulate the material world.

ここで述べられている内容は、次のようなことである：確かに英文法というものは存在するが、その英文法は中身の無い形式を扱う規則にしか過ぎず、言語学習の妨げにこそなれ、役には立たない。文法にしる、修辞論にしる、辞書にしる、言語の生きた姿や個々の語の多様な機能、語や句の独特の微細な意味、英語のイディオムの精神・真髄を扱うものはない。ある表現をつかまえて、これは慣用的 (idiomatic) だ、などというだけでは不十分である。イディオムは成長するものであり、すべての成長は自然法則に従っている。簡潔を好む傾向から生じたもの、強調のために生じたもの、目立たせる目的から生じたものがある。イディオム形成は、無秩序にできたものではなく、人間の思考の表現は物質世界を支配する経済の法則に勝るとも劣らない経済の法則に支配されている (八木・井上 2007 to appear)。

前述したが、斎藤の *idiomology* は、今日使用されている *phraseology* と同様の考えであった。

では、話を *phraseology* の実証的研究に戻そう。前述したが、Hartmann and James (1998) の *phraseology* の定義より、*phraseology* は成句であればどのようなものでも研究対象になるので、明確に研究対象を断言することはできない。また、近年行われている *phraseology* は、膨大なデータの中から何が成句表現であるかを見つけ出す必要があるため、コーパスなくしてはできない研究である。そこで、以下の table に Cowie (1998) に収められている *phraseology* の論文、その他 *phraseology* の研究で取り扱っている研究対象と使用されている用語、その研究での成句表現の定義をまとめた。

Table 1 Terms and definitions of phraseology in major previous studies

<i>Author</i>	<i>Terms</i>	<i>Definitions</i>
Alterberg (1998)	recurrent word-combinations	consisting of at least three words occurring at least ten times
Gläser (1998)	phraseological unit	a lexicalized, reproducible billexemic or polylexemic word group
Howarth (1998)	phraseological unit	collocations
Moon (1998)	fixed expressions and idioms	units of two or more words
Aijmer (2002)	discourse particle	to give important clues to how discourse is segmented and processed
八木 (1999, 2000), 西澤・井上 (2003)	成句表現	口語英語で頻繁に繰り返し使用される表現
Kärkkäinen (2003)	epistemic phrase	epistemic phrase such as <i>I think</i> , <i>she said</i> , etc.
八木・井上 (2004), 井上 (2003, 2004, 2005b), Inoue(2005a, c, 2007), 八木 (2006, 2007a)	phraseological units	頻繁に繰り返し使用される表現

Table 1 からわかるように、phraseology が取り扱う範囲は広大で、使用されている用語、定義も様々である。また、phraseology といっても多様な研究方法がある。研究対象はおもに語を超えた句のレベルという一致点はあるが、それを何と呼ぶかという点についてもまことに多様である。まさに以下に引用するように Cowie (1998: 4) が述べているとおりである。

(7) In phraseology, as in other fields within linguistics, it is not uncommon for individual scholars to apply different terms to the same category (or the same term to different categories). I have therefore thought it essential – while not suppressing individual differences – to provide a general framework, in which the terms used by any one individual can be understood in relation to those used by others.

3 phraseology の英語教育における可能性 – writing クラスの pilot study

これまでの日本の英語教育は、文法規則、単語の丸暗記が主であった。しかし、前節までで述べたとおり、人間が言語を習得、発話する際、input, output 両方場合とも成句表現が重要な役割を果たす。筆者は、これまで output されたものの中から成句表現を選び出し、その文脈に応じた意味・機能を探ってきた。そこで本稿は、筆者が担当している 1 年生対象 writing クラスにおいて、output の際に成句表現を教えることにより、学生の writing 能力向上に変化が見られるのか pilot study として検証した。

対象学生は、大学生、外国語学部所属の 1, 2 年生 18 名、科目名は 1 年生対象 Composition I、毎週火曜日 1 限開講で春学期で計 14 回の授業回数がある。学生の平均的なレベルは、短文を正確に書くことを目標としている。どのように成句表現を教えたかという点、Composition I のテキスト、*English Writing for Global Communication* (Kinseido, 2007) を使用した。そのテキストは、20 章から成り立っており、前半部分 (Chapter 1 ~ Chapter 12) は「自らを語る」ということで、学校生活から学生

自身のこと、家族のこと、友達のこと、住んでいる街などと学生が身近に感じるトピックを扱っている。このテキストの特徴として、それぞれのトピックに関して words and phrases というセクションを設けて、様々な成句表現を記述している。後半部分 (Chapter 13 ~ Chapter 20) は、現在世間で注目を浴びている環境問題のような社会問題を取り扱い、それに関して議論をしたり、自分の意見を書くことを目標としている。

前半部分の一例をあげる。Chapter 1 は、「Talking about Myself –はじめまして」というトピックで、以下のような words and phrases を紹介している。

(8) 名前・出身

～にあやかって名づけられる	to be named after ~
私の名前の由来は～です。	My name comes from ~.
～で生まれる	to be born in ~
	～で育つ
	to be brought up in ~

所属・専攻

専門は～です	to major in ~	副専攻は～です	to minor in ~
専門は～で・・・を専攻している			to study ~ with an emphasis on ...
テニス部に所属する			to belong to the tennis club

アルバイト

～のアルバイトをする			to work part time as ~
働きながら大学を卒業する			to work one's way through college
店員	salesclerk	塾講師	prep-school teacher
家庭教師	home tutor	レジ係	cashier

趣味・特技

～に興味がある			to have a taste for ~
趣味として～をしている			to do ~ as a hobby
～の特技を持つ			to have a talent for ~
趣味が広い			to have a variety of interests

性格・特徴

気質は父親譲りである				to take after one's father in temperament
責任感が強い				to have a strong sense of responsibility
意思の強い	strong-willed	思いやりがある		thoughtful
外交的な	outgoing	寛大な		broad-minded
辛抱強い	patient	勤勉な		hardworking
博識である	knowledgeable	謙虚な		modest

(8) のように、各章のトピックに応じた words and phrases が記述されている。

春学期の授業進度はテキストの Chapter 1 ~ Chapter 12 で各章のトピックは (9) に示すとおりである。

(9) Chapter 1	Talking about Myself	はじめまして
Chapter 2	A Day in My Life	わたしの 1 日
Chapter 3	My Family	家族を語る
Chapter 4	My Town and Neighborhood	わが町を語る
Chapter 5	My Likes and Interests	こんなことが好き
Chapter 6	The Joy of Shopping	楽しいショッピング
Chapter 7	My Campus Life	学生生活
Chapter 8	My Kind of Career	こんな仕事がしたい
Chapter 9	Romance, Dating and Marriage	恋・デート・結婚
Chapter 10	Fashion and Trends	ファッションとトレンド
Chapter 11	Travel and Correspondence	旅と便り
Chapter 12	Sports and Entertainment	スポーツと娯楽

学生のテキスト理解度、進度具合から、毎週というわけではないが、学生に定期的に words and phrases を使用した英作文の課題を与えた。以下に学生が書いた英作文の一例を紹介する。words and phrases で出てきた表現に下線、その他の成句表現をイタリックで記した。なお、文法、綴り等の間違いは訂正していない。

まずは、Chapter 2 の A Day in My Life で書いてもらった英作文を紹介する。この章の words and phrases では、to wake up one's refreshed, to sleep late, to dash to the station, to arrive 10 minutes late, to attend the first class period class, to miss class, to get home by 6:00, to clear the table, to do the dishes など日ごろの生活を表現するのに便利な成句表現が記述されている。この成句表現を使用して、学生の日を書いてもらった。2名の学生の英作文を以下に紹介する。

(10) A day in my life begin to *get up* at 6 o'clock. I can usually wake up refreshed except for having sit up late. First, I fix breakfast to wake up myself completely. And then, I have rice and miso soup, I love miso soup. Next, I go to the university to attend the first period class by feet. I have the first period class every day, so I sometimes feel hard. After I finished classes, I study Japanese Literatures (classics) to teach for an overseas student. Recently, I *enjoy studying* that. Afterwards I *get home by* 8:00 and then fix dinner.

[2年生男子学生]

(11) I always wake up with the alarm clock at 7:30. First, I *wash my face*. Next, I *eat breakfast* and *brush my teeth*. I come to university by bus. I dash to the bus stop. I get to here at 8:00. I attend the first period class every day. Because the first period is English, I *look forward to* university. I never miss class. And I never doze in class. I have 3 classes in a day.

[1年生男子学生]

次は、Chapter 10 Fashion and Trend で学んだ words and phrase (come into fashion, lead the fashion, take off a ring, see if it fits, try on ~, go out of fashion) を使用して書いた英作文である。この場合は、what do you usually wear to university? and why? という設問に答える課題である。

(12) I usually wear jeans and T-shirt to university. I like jeans and because it matches any clothes. Maybe, I may wear it every day. I don't always like following the fads. I always think I *want to put on* clothes which *suit me*. So, my fashion is *a little bit* individual. I put on make up every day. First, I put on mascara. Then I put on shadow and cheeks. And finally, I put on gloss. After that, I choose clothes. *It takes me much time* to choose because I'm so indecisive. After wearing clothes, I *choose matching* accessories for it. It's also hard to choose, so I fasten and unfasten necklace *again and again*. I don't like girlish fashion very much and I don't have skirts. But I *want to* try skirts someday. [1年生女子学生]

(13) I usually wear jeans with a T-shirt or jacket. What I wear is clothes *what we called* "casual". I like "casual" very much because I have some reasons. First, "casual" *make me comfortable*. Second, I don't know about fashion. Third, I don't know clothes which be in fashion now. nor can I take up a fashion and follow the fads. That is why, I *like to* wear "casual" very much. *On the other hand*, I dislike "punk". I don't *want to* wear gay hat and to put on loose pants. I don't *feel like trying on* them in dressing room. I am going to wear "casual" all the time. [2年生男子学生]

(14) I usually wear a T-shirt and jeans to university, because they look better myself. I wear this yellow T-shirt with blue jeans. I bought this jeans a year ago. I tried on it, but I *wanted to* buy the same style and loose one *at that time*, however, I did not *want to* take up fashion. So I bought it. Basically, I do not follow the fads. *By the way*, I always wear a bracelet, but I take off it, when I *take a bath* and do the dishes. This is because I don't *forget to* put my important things before myself. *That is to say*, this is my principle. [2年生男子学生]

最後に、Chapter 11 Travel and Correspondence で与えた課題英作文を紹介する。この場合も (12), (13), (14) の課題と同様に、where did you last go on trip? how did you travel? という設問に words and phrases を使用して英作するという課題である。

(15) I went on a trip to America with my family and my sister's boyfriend last summer. First, my father went to the tourist information office and reserved an overseas tour. Next we went through the embarkation procedures and filled out an immigration card. An hour later, we boarded a plane. And we contested a window seat with my sister. But I lost. I sat an aisle seat. The plane was ridden us took off. Fourteen hours later, we *arrived at* America. The plane landed slowly. We had a jet lag. But soon, we took a courtesy bus for the hotel. We didn't make a stopover. We stayed at an inexpensive hotel. We checked into the hotel. A few minutes, we rested in our room. I emailed my friends. I went sight-seeing with my family. I ate hamburger, bought cloth. Finally, we *went to* Disneyland. We enjoyed very much. *We returned home from* a trip to America. [1年生男子学生]

(16) I went to on a trip to Canada and did a homestay when I was a high school student. Canada has a grand nature and a beautiful piece of scenery. Moreover, *it's comfortable to* spend summer in Canada. I reserved

an overseas tour through a tour information office. It was my first trip to a foreign country, so I was nervous when I went through the embarkation procedures, filled out an immigration card, boarded a plane. In Canada, I went sightseeing so much. I really really enjoyed. I had precious time.

[1年生女子学生]

上記の(10)~(16)の英作文を見ると、テキストで学んだ成句表現であるかどうかに関わらず、多数の成句表現が観察される。単文を正確に書くことを目標としている学生でも、成句表現を覚え使用すると、単文レベルからパラグラフレベルまで書くことができ、自分の意見を表現することができる。学生が書いたものには確かに文法的な間違いが少なくない。しかし、そのような間違いに目を向けるのではなく、いかに英語を使用して、何を話すのかということに重点を置くべきである。

英作文に関わらず、英語学習者は、自分の表現したいことを自分の言葉を使用して相手に伝えることができればいいのではないかと思う。そのためには、文法規則、単語の丸暗記では対応できないので、自分が表現したいことに関連した成句表現を覚えることが必要不可欠になると思う。それが、文部科学省が目指す英語コミュニケーション能力向上にも繋がると考える。英語の4技能(writing, listening, reading, speaking)には、やはり成句表現を覚えておかないと、自分を的確に表現することはできず、相手に意思を伝えることもできない。このことより、pilot studyではあるが、英語教育の観点から writing の output 場合も成句表現を覚えることの意義があるといえる。

結語

本稿は、phraseology の概観から始まり、phraseology の英語教育、writing の場合の有効性を述べた。今後は phraseology の理解が深まるとともに、あらゆる分野での phraseology の発展に期待したい。本稿は、そのためのとっかかりにすぎないことを述べた。

注

本研究は、平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「英語が使える日本人育成のための英語学習文法体系構築と個別的記述の見直し」(研究代表者・八木克正、課題番号(7520335))によって可能になったことを記し、感謝する。

参考文献

- Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Altenberg, B. 1998. 'On the phraseology of spoken English: the evidence of recurrent word-combinations.' In A. P. Cowie (ed.), *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford Clarendon Press, 101-122.
- Burger, H. (ed.) 2007. *Phraseologie: ein Internationales Handbuch Zeigenössischer Forschung./ Phraseology: an International Handbook of Contemporary Research*. (Handbook of Linguistic and Communication Science = Handbücher zur Sprache – und Kommunikationswissenschaft; 28.1-2). Germany: Walter · de Gruyter GmbH & Co.
- Cowie, A. P. (ed.). 1998. *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Clarendon Press.
- Cowie, A. P. 1999. *English Dictionaries for Foreign Learners: A History*. Oxford: Oxford University Press.

- Gläser, R. 1998. 'The stylistic potential of phraseological units in the light of genre analysis.' In A. P. Cowie (ed.), *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Clarendon Press, 125-143.
- Hartmann, R. R. K. and G. James. 1998. *Dictionary of Lexicography*. London: Routledge.
- Howarth, P. A. 1998. 'The phraseology of learners' academic writing.' In A. P. Cowie (ed.), *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Clarendon Press, 161-186.
- 井上亜依 . 2003. 「口語英語の phraseology – you know what の場合」『言語コミュニケーション文化』(関西学院大学言語コミュニケーション文化学会) Vol.1, No.1., 29-43.
- 井上亜依 . 2004. 「口語英語の phraseology – let's say の多義性」 *The JASEC Bulletin* (日本英語コミュニケーション学会) , Vol.13, No.1, 16-26.
- Inoue, A. 2005a. 'Go and do, go to do, and go do – a corpus-based phraseological analysis.' *ASIALEX '05 Singapore Proceedings, Words in Asian Cultural Contexts*, 86-90.
- 井上亜依 . 2005b. 「Here, there を伴った成句表現の多義と融合現象」、田中実・神崎高明 (編) 『英語語法文法研究の新展開』 東京：英宝社 , 70-76.
- Inoue, A. 2005c. 'A Corpus-based Study on the Phraseology of Spoken English with Special Reference to the Polysemy and Multifunction of Frequently-Used Phrases' Doctoral thesis, The School of Language, Communication and Culture, Kwansei Gakuin University.
- Inoue, A. 2007. *Present-Day Spoken English: A Phraseological Approach*. Tokyo: Kaitakusha.
- Kärkkäinen, E. 2003. *Epistemic Stance in English Conversation: A Description of its International Functions with a Focus on I think*. Amsterdam/ Philadelphia: JohnBenjamins Publishing Company.
- Moon, R. 1998. *Fixed Expressions and Idioms in English: A Corpus-based Approach*. Oxford: Oxford University Press.
- 西澤緑・井上亜依 . 2003. 「Have/Did/ Do you ever ~? 構文の分析 – "Larry King Live" Corpus を使用して」 英語コーパス学会第 22 回秋季大会 (25/10/2003 明海大学)
- 八木克正 . 1999. 『英語の文法と語法－意味からのアプローチ』 東京：研究社出版.
- 八木克正 . 2000. 「口語英語と辞書記述」 *Helicon*, No. 24, 30-66. 帝塚山大学.
- 八木克正 . 2006. 『英和辞典の研究－英語認識の改善のために』 東京：開拓社.
- 八木克正 . 2007a. 「現代英語の新しい成句と構文」『言語と文化』(関西学院大学言語教育研究センター) No. 10: 1-16.
- 八木克正 . 2007b. 『世界に通じない英語－あなたの教室英語、大丈夫?』 東京：開拓社.
- 八木克正・井上亜依 . 2004. 「譲歩を表す成句表現に伴う省略現象」『英語語法文法研究』(英語語法文法学会) No. 11: 158-173. 東京：開拓社.
- 八木克正・井上亜依 . 2007 to appear. 「日本の phraseology – 歴史と展望」『六甲英語研究・小西友七先生追悼号投稿論文』